

本多静六博士～日本の緑を育てた埼玉の偉人～
第3話 「日本の公園の父」としての本多静六

今回は、「日本の公園の父」としての本多静六博士の主な業績についてお話します。

本多静六は、東京都千代田区の日比谷公園の設計を最初として、日本各地の公園の設計や改良を手がけました。その数は大小合わせて数百とも言われています。また、国立公園の創設も静六の努力によって実現したことから、静六は、「日本の公園の父」と呼ばれています。

静六は、人々が自立した生活を送るためには、健康であることが大切であり、健康を維持するために、自然と触れ合うことのできる公園は重要な施設であると考えていました。そして、公園を整備することは、都市住民の健康維持だけでなく、地方経済の発展と文化の普及にもつながるものだと考えていたのです。



本多静六が関係した主な公園



氷川公園(現在の大宮公園)の改良計画図

このことから、静六の公園設計には、公園までの交通手段をどのように確保するかといった視点や、公園内の茶店・売店でどのような特産品やパンフレット、絵葉書を販売して、財政面で公園運営を助けるのかといった視点が含まれていました。

公園にどのように人を集め、お金を動かし、地域経済の発展や文化の向上につなげていくのかといった視点が盛り込まれていることが静六の公園設計の特徴になります。

静六の手がけた全国各地の公園は、現在も存続し、人々の憩いの場となっています。また、観光地・景勝地として名高い公園もあり、静六は、その基礎をつくったものと評価することができます。

次に、静六が公園設計を手がけるきっかけとなった、東京都千代田区の日比谷公園をご紹介します。

静六が手がけ、明治36年(1903)に開園した日比谷公園は、日本初の洋式公園として知られています。

この公園は、明治21年(1888)当時の東京市の都市計画で、洋式



日比谷公園

公園の設置が決定され、当初は、東京駅の駅舎を設計したことで知られる建築家の辰野金吾が公園の設計を担当していました。

当時は誰も洋式公園を設計した経験がない中、ある日偶然、辰野のもとを訪れた静六が、ドイツ留学中の現地の公園の概要を話したところ、公園設計の適任者として、辰野の推薦により、明治34年（1901）静六が34歳の時、日比谷公園の設計担当者に任命されたのでした。

静六は、ドイツで林学を学んではいましたが、公園に関して専門的に学んだことはなく、洋式公園の設計には大変苦労しました。

また、当時はほとんどの日本人が知らない洋式公園に対して、様々な不安や疑問が投げかけられました。静六の公園設計案に対して、東京市議会からは、公園に門や扉を設置しないことや、公園内の花が盗まれるのではないか、あるいは公園内の池が身投げの名所となるのではないかといった批判が投げかけられました。

これらの批判に対して、静六は、公園が公共道徳の育成の場であるとして、公園の花が盗まれないくらい公共心を発達させ、国民が花に飽きて盗む気が起きないくらい、当たり前存在にしてみせると答えました。池についても、周囲を浅瀬にして淵から飛び込めないようにすると答え、ようやく議会から工事の着手が認められました。



首かけイチョウ(日比谷公園)

現在日比谷公園には、「首かけイチョウ」と呼ばれるイチョウの大木があります。この「首かけイチョウ」は、もとは公園の外から移植されたものですが、この木も静六の日比谷公園設計の苦労話を今日に伝える木として知られています。

「首かけイチョウ」は、樹齢500年とみられる木で、もとは日比谷交差点近くにあった木でした。この木が道路拡張のため伐採されようとしたところを静六が止めに入り、自分がこの

木を引き取り、移植させたいと東京市側に願い出ました。

これに対して、東京市側は、専門の植木職人が移植は難しいと諦めているものを、林学の専門家でも成功させることはできないだろうと、移植を認めませんでした。静六は、自分の首をかけてでも移植を成功させると決意を伝え、ようやく移植の許可がおりたのでした。

そして、静六は、この木を無事に日比谷公園内に移植させることに成功したのでした。

このように、幾多の困難や苦労を経て、静六が設計した日比谷公園は開園し、今日まで多くの人々に利用され、親しまれてきました。

この日比谷公園の設計と成功により、静六は公園設計者として知られることとなり、この後、静六のもとには、全国から数多くの公園の設計や改良の依頼が届くことになりました。